

I サムエル 24 章「主の主権に従う」

宗教改革記念礼拝です。宗教改革の原理「信仰のみ、聖書のみ、恵みのみ」の中の「聖書のみ」について。ルターは「神のことばが、教会の教えと信仰告白を確立する」と主張しました。教皇も教会会議も最終的な権威ではなく、キリストの教会における一切の権威は聖書の権威に服すべきであるという主張が「聖書のみ」です。ただし、「聖書のみ」とは、教会の伝統を否定するものではありません。聖書を正しく解釈するには教会の歴史の中でまとめられてきた信仰告白や信条が必要です。しかし、人の解釈は間違い得るので、「聖書のみ」に権威があると認め、聖書に聞く必要があるのです。そして、神のことばを正しく理解することも、服従することも、聖霊によらなければできません。ですから、「聖書のみ」とは「聖霊のみ」と言うこともできます。究極的には「神の権威のみ」ということなのです。

今日の箇所に記載されているダビデの信仰の態度から教えられるのは、主の主権に従うということです。

1. 洞穴での出来事（：1～7）

ダビデと部下たちは捕らえようとして迫ってきたサウルの軍勢から危機一髪のところで守られました。主がダビデとサウルの間を仕切り、ダビデを守ってくださいました。ダビデと部下たちは死海の沿岸のエン・ゲディの荒野に行き、洞穴に非難しました。

サウルは三千人の精鋭を選び、ダビデを捜しに出かけます。サウルは被害妄想に駆られ、謀反を企てているダビデをなんとしても殺害しなければならないと考えていたのでしょう。

サウルは用をたすために一つの洞穴に入りますが、なんと同じ洞穴の奥の方にダビデと部下たちが隠れていました。千載一遇のチャンスです。主が与えてくださったチャンスですと部下が言うのもよく分かります。

私たちがいる課題について主のみこころを求めて祈り続けているときに、道が開かれるような出来事が起こると、これはまさしく神のみこころに違いないと考えるのは無理からぬことです。どのようにして神のみこころを判断していったら良いのでしょうか。

ダビデはそっとサウルに背後から近づき、上着の裾を一部こっそり切り取りました。そして部下に言いました。6節。部下はサウルのことを「あなたの敵」と言っていますが、ダビデはサウルのことを「主に油注がれた方」と繰り返し言っています。ですから、このことはダビデとサウルの間のことではなく、ダビデと主の間のことなのです。主がサウルに油を注がれたのですから、そのサウルに手を下すことは主に逆らうこととなります。主に逆らうことは絶対にありえないとダビデは断言するのです。

部下たちはダビデが手を下さないなら自分たちがやりますと、サウルに襲いかかろうとするほどだったのでしょう。部下たちはダビデに忠誠を尽していました。しかし、ダビデは断固とした態度でサウルに害を加えることを許しませんでした。

こうして、主を恐れる者としてダビデは、自らの手で道を開こうとはしませんでした。人の方法に頼ることを避けました。そして、神がなさること、それが最善の道ですが、それを待ち、委ねたのです。

私たちが神のみこころを求めるときにも、まず主を恐れることです。その課題に対して自分がどうするかの前に、主に対して自分がどのような態度であるかをよく考えるべきです。そして、神がなさる最善に委ねることです。

2. ダビデの弁明（：8～15）

サウルが洞穴から出て行くと、ダビデも後から出て行き、サウルに「王よ」と呼びかけ、地にひれ伏して、礼をしました。それからダビデはサウルに弁明を始めます。

9節。ダビデはサウルが人のことばに踊らされていることが分かっています。そして、その元には嫉妬があることを知っています。ダビデはつい今しがた洞穴の中であつた部下とのやりとりを伝えます。サウルを殺すように言った部下を止まらせたダビデのことばを伝えます。そして、サウルに背く意志がないことの証拠として、切り取った上着の裾を示します。自分が無実であること、サウルに対して誠実であることを訴えます。

サウルは驚いて、ダビデが自分を殺す機会があつたけれども、そうしなかったことに感動したことでしょう。

ただ、ダビデはサウルの情に訴えるだけでなく、主のさばきに委ねていると言います。12節。ダビデはサウルに対していかなる暴力も使うつもりはないことを明らかにしています。自分の力で自分を守ろうとしない、状況を変えようとしなさいと言います。よく知られていたことわざ『悪は悪者から出る』をとりあげます。自分が悪者であれば、サウルは殺されていたであろうということです。また、自分はイスラエルの王が追いかける必要のない者だと言います。「死んだ犬」も「一匹の蚤」も自己卑下したことばです。サウルが捜して追いかけても得られるものは何もないということです。

最後にもう一度、主のさばきに委ねると言います。15節。ダビデはただ主の正義に頼り、主のさばきに委ねているのです。

このダビデの弁明から、彼が主に油注がれた王としてのサウルに徹底的に謙遜であったことが分かります。そして、自分の手で解決を図ろうとするのではなく、主を信頼し、主の正義に頼み、主のさばきに委ねていることが分かります。このような態度は消極的だと思われるかもしれませんが、主を恐れている者の主に対する積極的な信仰の態度です。言い方を変えれば、主の主権に従う、徹底して従うという強い信仰の態度なのです。

3. サウルの涙にもかかわらず（：16～22）

ダビデのことばを聞いたサウルは「わが子ダビデよ」と言って、声をあげて泣きました。17節。サウルはダビデが正しいと認めます。涙を流して自分の非を認めています。真実の悔い改めではないようです。

サウルの関心は依然として自分自身であることが分かるからです。「私に良くしてくれた」ことに感動しています。また、神、主が忘れられています。サウルのことばの中には「主」とありますが、主の民として習慣的に使っているに過ぎないと思います。サウルは、ダビデが自分に手をかけなかったのは、ダビデの人間性によることと捉えており、ダビデの誠実さが主に対するものであることを考えていないのです。サウルの涙もことばも一時的な感情の高ぶりだったと分かります。

そのようなサウルの状態は、その後の行動からも分かります。20節では、サウルはダビデがイスラエルの王となることを認めています。そして21節では、自分の子孫のことをダビデに守って欲しいと願い、誓いを求めています。

この二つのことはヨナタンにはすでにありました。主への信仰によってヨナタンとダビデは結びついていました。それゆえに二人は主の前で誓いました。そして、ヨナタンはサウルの殺意を確かめるとダビデを逃しましたし、サウルに追われているダビデのところに行って、励ましたのです。ヨナタンのことばが真実であったことが分かります。

しかし、サウルはどうでしょうか。その後、「サウルは自分の家へ帰り、ダビデとその部下は要害へ上って行った」とあります。サウルのことばが真実であるなら、ダビデを連れて帰るはずではないでしょうか。

一時の感情ではなくて、主の御前で真実に悔い改めたかどうかが大事です。そして、心の思いは行動となって現れるのです。真実の悔い改めと主への信仰はどのように与えられるのでしょうか。主の恵みによるのです。聖霊の御業によるのです。

今日の箇所のだビデの態度から教えられるのは、主の主権に従うということです。サウルに手を下すチャンス、これで逃亡生活を終わられると思われた時にも、ダビデは主に油注がれたサウルに対して徹底的に謙遜でした。彼は主を恐れており、主に逆らうことは絶対にあり得ないと言いました。そして、自分の手で解決を図ろうとするのではなく、主を信頼し、主に委ねました。主の主権に従う信仰の態度を保ちました。

私たちもこのダビデの信仰の態度に倣う必要があります。生活の中で主のみこころを求めることや問題の解決を願うことはさまざまな場面であります。そういうときに、自分の力や方法で解決を図ろうとするのではなく、主を恐れ、主を信頼し、主に委ねることを心がけ、祈り求めましょう。主の御前に正しく歩めるように、聖書のみ立つことができるように、聖霊のみわざを祈り求めましょう。神の権威のみに従うことができるように祈りましょう。